

調査の趣旨

1958年にニューヨークのマーサ・ジャクソン画廊で開かれた展覧会「具体ニューヨーク展」という事例を取り上げ、国境を越えて日本の美術が紹介され、評価される過程に生じるコンフリクトの諸相を考察する。

具体美術協会（以下、具体とする）は、関西を中心に活動した前衛芸術家集団である。吉原治良とその周りに集った若い芸術家たちが1950年代半ばにグループを結成し、吉原が没した1972年に解散するまで、従来の芸術の枠組みにとらわれない斬新で活発な制作を行い、国内外の注目を集めた。会員たちは、東京や京都などで展覧会「具体美術展」を開催し、作品を発表した。

具体ニューヨーク展は、具体にとって初めての海外展であった（のちに第6回具体美術展と位置づけられる）。本展は当初、吉原治良とパリを拠点に活動した美術批評家ミシェル・タピエの企画で1958年4月から日本各地で行われた「新しい絵画世界展(The International Art of a New Era)」をアメリカに巡回させる計画として企画が始まったが、出品作品は大幅に変更された。

1956年、日本で初めて「アンフォルメル(Informel、フランス語で非定形の意)」と呼ばれる抽象的な表現による絵画作品が展示され、その新しい表現は日本美術界にセンセーションを巻き起こした（「アンフォルメル旋風」と呼ばれる）。「アンフォルメル」は、上で述べた批評家タピエが、1950年代初頭から欧米で次々に台頭してきた抽象的な美術表現を包括的に論じるべく提示した概念である。吉原治良は1956年以前からアンフォルメルに具体の理念との共通点を見いだしており、共感をもってそれを受け止めた。タピエも日本の美術に興味を示し、1957年に来日、具体メンバーの知己を得た。この出会いが翌58年の新しい絵画世界展の企画につながった。

具体ニューヨーク展に関しては、当時具体が刊行していた雑誌『具体』の第10号で特集が組まれる予定だったが、原稿紛失のため出版ができず、第10号は欠号となっている。そのことも影響して、本展について知られている資料は限られており、これまで不明確な点が多かった。今回の調査の成果をもとに詳細な考察を行うことで、実証的な研究が可能となる。

具体のリーダー吉原治良、フランス人批評家ミシェル・タピエ、画廊主マーサ・ジャクソンの三者が思い描いた具体ニューヨーク展のあり方は、さまざまなコンフリクトを生んだ。本展は、日本、フランス、アメリカの美術の闘争の場でもあった。また、具体の吉原以外のメンバー、アメリカの美術批評家、展覧会巡回先の美術館関係者、国外で活躍する日本人芸術家、在米の日系人芸術家など、多くの人々を巻き込んだ本展は、摩擦や軋轢をはらみながら開催へと至った。世界への飛躍の第一歩、グローバルな評価を得た成功例といった従来の解釈を見直し、具体ニューヨーク展の実態を検証して、その複雑な様相を明らかにする。

調査内容

○兵庫県芦屋市 2010年3月1日 — 6日

吉原治良が残した書簡などの資料は、現在も吉原家が所蔵している。これらの吉原文書は一般に公開されていないが、芦屋市立美術博物館学芸員の加藤瑞穂氏の協力を得て、調査が実現した。

「新しい絵画世界展」および「具体ニューヨーク展」の開催にこぎつけるまでの過程が、タピエ、堂本尚郎らと吉原との手紙の往還から浮かびあがる。

○アメリカ 2010年3月8日 — 30日

次の3つの機関において、「具体ニューヨーク展」とその後のアメリカ国内巡回展についての資料収集を行った。（）内には調査した資料の概略を示す。

- ・ニューヨーク・パブリック・ライブラリー
(具体ニューヨーク展に関する批評、巡回先に関する資料)
- ・アーカイヴス・オブ・アメリカン・アート
(マーサ・ジャクソン画廊と最初の巡回先であるベニンソン・カレッジに関する資料)
- ・UB [ニューヨーク州立大学バッファロー校] アンダーソン・ギャラリー
(マーサ・ジャクソンとその息子デイヴィッド・アンダーソンの旧蔵資料)

マーサ・ジャクソン画廊側の資料と吉原文書とを比較検討することにより、ニューヨーク展の輪郭がより明確になる。本展に関する批評には、ニューヨーク美術界の具体に対する拒否反応があらわれている。その一方で、ゲストブックやマーサ・ジャクソンのもとに届いた手紙類には熱狂的な反応も多く、アメリカにおける具体受容のさまざまな面が看取される。また、1985年にワシントンDCのアメリカ美術館で開かれた「マーサ・ジャクソン・メモリアル・コレクション」展において、具体ニューヨーク展は、画廊にとってのターニングポイントのひとつと位置づけられている。

フランス人批評家ミシェル・タピエは、いわばグローバル・スタンダードとしての「アンフォルメル」を具体にあてはめ、高く評価した。このこと背景には、美術の中心をめぐるパリとニューヨークの覇権争いの中で、フランス美術の復権をねらう意図があったと考えられる。タピエの存在は、アメリカでもよく知られており、具体ニューヨーク展のプレス・リリースなどにおいては具体のリーダー吉原治良よりも先に名前が挙がる。

アメリカ国内外の同時代美術を扱っていた画廊主マーサ・ジャクソンは、すでに多くの画家たちが抽象的な表現に取り組んでいたアメリカにおいて、具体の作品がそれらの単なる亜流としてとらえられることを懸念した。彼女は具体を、日本の、しかも大阪から来たグループとしてプロモーションを行った。ここにはアンフォルメルのグローバル性に対するローカル性がみとめられ、吉原にとっても「大阪」や「関西」を打ち出すことは自らのアイデンティティにつながる問題として重要であったと思われる。また、1958年に先駆的に具体を紹介したマーサ・ジャクソン画廊のインターナショナルな性格も読み取れる。

1958年に開催された具体ニューヨーク展についての考察は、1960年代以降の具体の国際性の検討へとつながるものでもある。1959年以後、アメリカ国内で具体展が巡回し、具体トリノ展の開催(第7回具体美術展)、海外からの相次ぐ作家の来日、1960年のインターナショナル・スカイ・フェスティバル、1962年グタイピナコテカの開館、1965年ヌル国際展(オランダ)への招待と、具体と海外とのつながりはますます重要になっていく。